

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370660

研究課題名(和文) 棲み分け理論に基づく英語前置詞の意味論的研究とそのモジュール教材への応用

研究課題名(英文) The Study of the Semantics of English Prepositions and its Application to Modular-style Teaching Materials

研究代表者

花崎 一夫 (HANAZAKI, Kazuo)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授

研究者番号：40319009

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語前置詞の意味論的研究を、認知言語学の知見を活用して行った。その一つが前置詞のwithであるが、英和辞典に記載されている様々な「意味」は、当該前置詞が使用される様々な場面に応じて導き出される「用法」であると考えた。そして様々な用法を説明するような英語前置詞の教材を作成し、大学の英語教育において、自学自習用教材として活用できるようにし、英語教育の現場に成果として還元した。

研究成果の概要(英文)：In this study we analyzed various kinds of English prepositions. One of the prepositions we took up is "with." We pointed out that typical English-Japanese dictionaries ended up listing various meanings of "with" in Japanese, which is not satisfactory from an educational point of view. We argued instead that the only meaning of "with" is "accompaniment" and that the list of meanings of "with" is actually the various usages of "with." Based on this observation, we created the teaching materials concerning English prepositions including "with" and contributed to the English education in our university.

研究分野：英語教育

キーワード：認知言語学 英語前置詞 モジュール教材

1. 研究開始当初の背景

前置詞の多義研究は、1語の多義を扱う Semasiological な研究(例: fruit は果実・結果・・・という意味があるとする研究)が中心となっている傾向があるが、本研究では、それに近似義語を扱う Onomasiological な視点(例: 果実を表す語には fruit・nut・・・があるとするとする視点)を加え、その近似義語間に見られる意味の重なり of 緊張関係が意味拡張を阻止すると考えた。先行研究には2語以上を扱う研究もあるが、それらの違いを述べるにとどまり、その違いが意味拡張を制限するといったような「動的」な研究は見られない。我々は以前、前置詞の多義を従来の意味論でしばしば行われるように Semasiological な視点で研究してきた。しかし、その一連の研究で、従来のメタファー・メトニミーによって意味拡張を説明しようとする理論は、(1)意味が際限なく広がることを阻止することができず、(2)新しい意味の予測が不可能であることがわかった。そこで意味拡張は、複数の可能性が緊張関係の中に存在した後、それぞれの語の弁別的意味要素により取捨選択されることを通して行われるという見解、つまり、語用論的強化(pragmatic strengthening)を中心とした行為理論によって意味「用法」の拡張の可能性を探り、さらに、Onomasiological な視点にたち、近似義語の中心義が意味拡張を制限するという立場をとれば、上述の問題は解決されることに気がついた。この考えのもとに我々は、平成28年度まで前置詞の棲み分け研究を行い、一定の成果をあげてきた。さらにその成果を英語教育の現場に還元させるべく、自学自習用モジュール教材を作成することとなった。

2. 研究の目的

本研究では主要な英語前置詞の意味論的研究を行うとともに、その成果を教材としてまとめ、大学の英語教育の現場に還元することを目的とした。より具体的には、認知言語学

の立場から行った前置詞研究から得られた知見を、学会発表、論文などで公開するのみならず、それを大学の英語教育の現場で実際に活用することを目的とした。

3. 研究の方法

多義語の意味拡張に、従来はあまり考慮されてこなかった近似義語の研究を行う Onomasiological な視点を入れることが本研究のもう一つの大きな特徴である。Onomasiological な視点を導入すると、従来の研究で問題だった「際限ない意味拡張」を阻止できると同時に、「新しい意味の予測」が可能になる。またこの視点を導入することにより、孤立用法や慣用表現の中心スキーマとの関係をもよりよく説明出来る。

慣用表現とは、2語以上の語が集まって使われる表現(例: but for, by day)であるが、従来の多義研究では、それらは、メタファーやメトニミーによる意味拡張によってできたと説明されてきた。ところがその説明だけでは、意味拡張を制限出来ないだけでなく、どうして中核から大きくはずれた意味は、2語以上の語が集まった慣用表現の形でしか残ることができなかったかが説明出来ない。本研究は、慣用句は、onomasiologically に共存していた複数の語の内(例: 「～の間」by, during)、他の語にブロックされたものは、別の語との組み合わせの中でのみ存在するものであるという見解をもつ。

4. 研究成果

本研究は、その研究成果を大学生の英語教育の現場に還元することを目的として実施された。一般的に「機能語」と呼ばれる語の学習は、英語学習者が最も困難に感じる学習の一つである。そこで本研究は、個々の前置詞の意味を、前置詞の「棲み分け」を体系的に説明することを通して明らかにすることによって、多くの英語学習者が困難に感じる

「機能語」の学習の負担を軽減することを実現させた。具体的な成果は、自学自習用モジュール教材としてまとめられ、大学の英語教育の現場で活用した。

より具体的には、作成した教材を授業中に活用するだけでなく、e-ALPS という信州大学独自のイーラーニングシステム上に教材をアップロードし、学習者が授業時間外の好きな時間に活用できるようにした。こうすることで、比較的英語が苦手な学習者も、授業時間外に自学自習することが可能になり、結果的に、大学生の英語基礎力の向上につなげることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

Teaching English to Japanese EFL Learners Using Phonetics: A Pedagogical Application of the Vowel Triangle

2017 Hawaii University International Conferences Arts, Humanities, Social Sciences&Education,:1-8 2017(Jan.)

Author: 花崎一夫・花崎美紀・藤原隆史

Keywords: phonetics, vowel triangle

認知言語学の知見を活かした英語使役動詞 have の教授法とその教育的効果

教職研究,(第9号):35-42 2016(Dec.)

Author: 藤原隆史・花崎美紀・花崎一夫・菊池聡

Keywords:認知言語学 英語教育・使役動詞

日本人 EFL (英語第2言語学習者)への効果的な前置詞教授法:前置詞 With を例にして

教職研究,(第9号):23-34 2016(Dec.)

Author :花崎美紀・花崎一夫

Keywords: EFL, 前置詞, with

大学生の英語科指導法における内発的動機付けおよび社会への関心を高め、地域との連携を強める試み

地域ブランド研究 第11号,:61-68 2016(Mar.)

Author: 花崎一夫・花崎美紀・植木宏・藤澤翔

Keywords:中大連携・英語教育・内発的動機付け

Words that Seem to Denote "Places" in English and Japanese: English

Prepositions and Japanese

Postpositions

2016 Hawaii University International Conferences:1-18 2016(Jan.)

Author:Miki Hanazaki, Kazuo

Hanazaki

Keywords: preposition, postposition, homology, polysemy

Teaching Prepositions to Japanese EFL College Students: Bridging Theory and Practice

International Journal of Language Education and Applied Linguistics (IJLEAL),Vol3:1-10 2015(Dec.)

Author: Miki Hanazaki, Kazuo Hanazaki

Keywords:E-learning, Modular-style teaching material, Polysemy, Preposition

英語教育に活用するモジュール型教材の可能性 ー英文法の学習を中心にして -

日本 e-Learning 学会第18回学術講演会論文集,:95-104 2015(Oct.)

Author: 花崎一夫・花崎美紀・藤原隆史

Keywords:モジュール型教材・英語教育・前置詞

高等学校に於けるモジュール型言語教材の可能性 ー使役動詞を中心にした教授法 -

日本 e-Learning 学会第18回学術講演会論文集,:70-77 2015(Oct.)

Author: 藤原隆史・花崎美紀・花崎一夫
Keywords:モジュール型教材 英語教育
認知言語学の知見を活用した使役動詞
have の分析—よりよい英語教育を目指し
て -

言語教育センター実践報告,(第4号
号):46-57 2015(Mar.)

Author: 花崎一夫・藤原隆史・花崎美紀

Keywords:使役動詞 have

At の意味論

英文学研究,支部統合号(Vol.):127-135
2015(Jan.)

Author: 加藤鉦三・花崎一夫・花崎美紀

Keywords:前置詞 At

Multidirectional Approach to the Semantics
of Have: Seeking a Unified Way of Teaching
its Polysemy to the EFL Students

2015 Hawaii University International
Conferences Arts, Humanities, Social
Sciences & Education 2015(Jan.)

Author: 花崎一夫・花崎美紀

A Pragmatic Strategy for Building
Accordance in Discordant Situations: A Case
Study on Negative Questions

2015 Hawaii University International
Conferences Arts, Humanities, Social
Sciences & Education,;1-25 2015(Jan.)

Author: 花崎一夫・花崎美紀

Keywords:語用論 否定疑問文 日英比
較

At の意味論

第86回大会 Proceedings,;210-211
2014(Sep. 16)

Author: 加藤鉦三・花崎一夫・花崎美紀

Keywords:前置詞, At 意味論

[学会発表](計1件)

The Effectiveness of Using Modular-Style
Teaching Materials in Teaching English
Prepositions to Japanese College Students

Universiti of Malaysia PAHANG ,
International Conference of Language
Learning and Teaching 2015(Oct.)

Author: 花崎一夫・花崎美紀

[図書](計1件)

英文法で学ぶ英会話 英文法の知識を活
用して会話力をつけよう

ブイツーソリューション , :1-105
2015(Mar.)

Author: 花崎一夫・花崎美紀

Keywords:英会話 英文法

6. 研究組織

(1)研究代表者

花崎 一夫 (HANAZAKI, Kazuo)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・
准教授

研究者番号: 40319009

(2)研究分担者

花崎 美紀 (HANAZAKI, Miki)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号:80345727

加藤 鉦三 (KATO, Kozo)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・
教授

研究者番号: 20169501